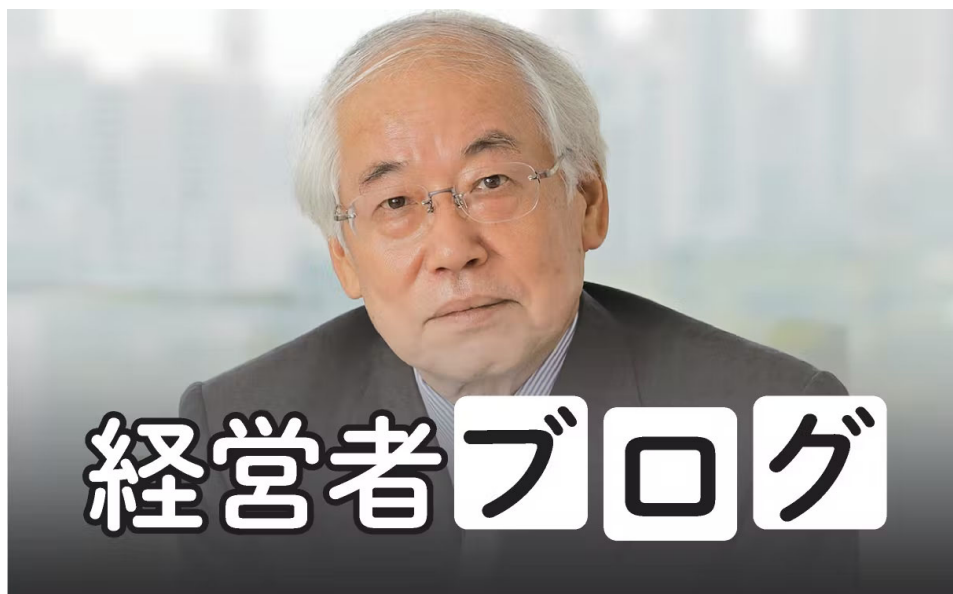


深刻な病は、パンデミックばかりでない

経営者ブログ 鈴木幸一 IJJ会長

2021/1/26 2:00 | 日本経済新聞 電子版



繰り返しになるのだが、確かに、今年は寒い。家にいる時間も長くなって、部屋を暖めては、分厚い本を手し、ソファに座るのだが、気がつけば居眠りをしている。夜、家で食事をするのが少なくなって、料理をしない習慣がついてしまうと、家に居ても、料理が面倒になって、ココアで体を温め、パンの一切れでも口にすると、そのままベッドにもぐりこんで、9時前に眠ってしまうこともある。

とるべきエネルギーを取らないと、夜中に寒気がするような気がして目が覚めることがある。幼稚園児と同じような時間に眠るのだから、夜中の1時、2時に目覚めても仕方がないのだが、食事だけは、面倒にしても、時間が来たら食べておかないと、よほど、じいさんくさくなるようだ。たまに寄る居酒屋のオヤジから、仕入れが難しいと、入り口に休業の札を張って、毎日、居眠りしていると連絡があった。私の窮状を訴えると、「ともかくさ、生卵と納豆でも買い込んで、ご飯を炊いて食べとけばいいのよ」。「それじゃ、IIJの創業時に月給がわずかししか払えず、ご飯を炊いて、納豆と生卵を変えて食べていれば、お金がかからないよと、社員に、お説教をした時代に逆戻りだ」と答えたのだが、当分、店を開ける気はないらしい。

■新型コロナ、米国は深刻な状況

累計の感染者数2496万2813人、死者41万6907人（1月24日時点）、米国における新型コロナウイルスの感染者と死者の発表されている数字である。同じ日の1日の新たな感染者数は、14万1千人とある。日々、発表される日本の数字に、脅威を感じているのだが、改めて、米国の数字の状況を知ると、日本とは、新型コロナウイルスによる被害状況が、桁違いの数字であり、最も深刻な国のひとつが米国であることを実感する。トランプ氏からバイデン氏に、大統領が代わったのだが、米国における新型コロナウイルスの状況、その対応策ひとつをとってみても、その深刻度がひどいことがすぐに理解される。トランプ氏が大統領になったことにより、米国の政治における最低限、守るべきコンセンサスが崩れてしまった。しかし、トランプ氏を選択し、先の大統領選挙でも50%近い支持をトランプ氏が得ていることを考えると、深い知識を持たない私など、新型コロナウイルスへの対応と同じように、米国社会における病弊の深刻さを思うばかりである。





梅（花薫美）

考えてみれば、トランプが大乗りを上げたばかりか、最後のだということが理解できた。4年間、米国の歴史からは、大統領になったからといって、米

■地球環境との共存が緊急の

科学と技術の一体化とその応用で、消費を膨らませ、経済を回している。欲望と消費の爆発的パンデミックは、米国をより深刻

しり取ろうする仕組みに私たちの体を差し出すこと——それこそ自由なのだと。そう、自由な国とは、これまでになく病んだアメリカ人の体から、これまでになく大きな富を搾り取ることのできる国であることを、私たちは理解すべきなのだと」

者を標榜する政治家が、名目上な社会現象の渦中にあった。トランプ大統領のようだが、バイデン氏が大統領

満たそうとする競争によって、地球との共存が緊急の課題となった。新型コロナウイルスというパンデミックの金銭を私たちから、む

「あまりにも高額な医療は、医療として機能しえない。およそ半数のアメリカ人は、彼らがその対価を払えないために医療行為を避ける。何千万人というアメリカ人が保険に入らず、加えて何千万人は不十分な保険にしか入っていない。（中略）もちろん、現実はいくらよりもひどい。新型コロナウイルスのパンデミックのあいだに、何千万人というアメリカ人が職を失ったせいで保険も失ってしまった。失業者たちが医療から置き去りにされているため、今度は、アメリカの全国民が苦しむ羽目となった。新型コロナウイルス感染の診断がついていなかったせいで、彼らは新型コロナウイルスをまき散らしたし、治療を受けられなかったために彼らは苦しみ、そして亡くなった。アメリカでは驚くほど短い病气休暇しか与えられないため、アメリカのすべての国民がリスクにさらされた。」（「アメリカの病 パンデミックが暴く自由と連帯の危機」、ティモシー・スナイダー著 慶應義塾大学出版会刊）

■日本も深刻な状況だ

引用した文章の著者ティモシー・スナイダーはイエール大学の歴史学の教授で、ウィーンで急な病に罹り、米国でも病床にあって書いていた日誌からウィーンと米国での病院の扱いの違いなどを、その体験から記している。日本でも、新型コロナウイルスの感染者数の増加に対して、再び緊急事態宣言がだされ、飲み屋の夜間営業に始まって、厳しい規制措置がとられ、休日でも街に出歩く人は半数以下になっている。深刻な状況には違いない。



梅（月宮殿）

先週の金曜日の夜、昼の時間だというイタリアのラベンナにいるリッカルド・ムーティさんとネットで話をした。新型コロナウィルス下、深刻な状況にあったザルツブルク音楽祭ではベートーベンの第9交響曲を振り、新年にはウィーンでニューイヤーコンサートに出演、ウィナー・ワルツを振って、元気いっぱいのムーティさん、個室だったこともあって、マスクなどせず、モーツァルトや、ハイドンの音楽について、あふれんばかりの情熱をもった話である。聴衆が私だけでは、本当にもったいない話だった。モーツァルトの音楽は、一点のゆるみもない「完全」という言葉が、唯一、ふさわしい音楽であると。18世紀末、「完全な音楽」を次々と残したモーツァルトが生きていた時代は、まさに欧州にとって、激動の時代でもあったのだ。

【関連記事】

- ・ [所詮、人事はめぐりあわせだが](#)
- ・ [世界は遊戯と闘争の果てに](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.